

踏 み 跡 < My mountains >

南蔵王

刈田峠から刈田岳

No. 038

暮の一週間を徹夜勤務、忘年会とあわただしく過ごして後、骨休めに母の故郷(祖母が一人で住んでいる)で正月を過ごそうということになった。田舎の山で雪山の練習をしながら本でも読んでこようという計画だった。

サブザックに山の道具と服装一式を入れ、小さなかばんに旅行用具と徳富蘆花の「自然と人生」。勿論背広、Yシャツと正装して、登山靴を手に下げての出発。

昭和39年12月27日

東京駅八重洲口21時発の東北急行バス仙台行。隣の席は運良く女性。早速リクライニングシートを低くして読書に入る。車内消灯しても、スポットライトがついているのでいつまでも読書してられる。

昭和39年12月28日

いつの間にか隣の女性が私の肩を枕にしだした。少々重いが悪い気はしない、と思いながらこっちも眠りに入る。目が覚めてみると、私の肩を枕にしている彼女の柔らかな髪は私の枕になっていた。

後ろから見たら只ならぬ関係に見えるかなと思って振り返ってみると、どの人も口を開けたりいびきをかいたりして誰も見てはいなかった。皆深く寝入っているので不思議に思ったら、ちょうど白河を通過しているところだった。(まさに白河夜船)

白石で下車、駅前旅館に荷物を預けて仙台へ。仙台で朝食をとり、ラッシュアワーの仙石線に乗る。

9月の東北旅行の時に立ち寄れなかった松島を見ようと言うわけだ。

松島海岸で下車し、海のほうに向かって歩いて行くと松島タワー。今にも泣き出しそうな空で寒い。こんな日に船で海に出てもつまらないだろうと思い、タワーから眺めるだけにする。

「松島は扶桑第一の光景にして、およそ洞庭、西湖に恥じず」と言うほどの眺めは見えず。軽食を取り海辺を瑞巖寺まで「松島のサーヨーオ瑞巖寺ほどの……」と斉太郎節を口ずさみながらゆっくりと散歩。岩窟が沢山ありスケッチしたくなかったが、腰をかけるところがないのであきらめ、白石へ戻る。

今朝荷物を預けた駅前の旅館に落ち着く。風呂、夕食そして八畳間で長火鉢に手をかざしながら日記、お茶をすすりながら「自然と人生」を読み、食後を過ごす。白い障子、きれいな畳、長火鉢、わずか数日であるからこそこんな雰囲気の中での一人ぼっちもうれしい。明日は蔵王へ行ってみることにする。

昭和39年12月29日

眠い目をこすって刈田峠行のバスに乗車。背広、Yシャツ、オーバーは旅館の鴨居に掛け、いつもの登山姿で。今回は雪中歩行の訓練を目的にワカンも持参。

バスは遠刈田温泉を経てチェーンの音をたてて登っていく。刈田峠の直下に新しくできたゲレンデの前が終点。ここからが本番。上山に抜ける雪に埋まったバス道を峠へ。

所々いい具合の斜面を見つけてはワカンを付けての上り下り。そして雪の深そうなところを見つけてはラッセルと、よくしまった雪の斜面では尻セード。

峠付近で夕方のバス(終バス)までたっぴりと訓練(遊び?)。

快晴に恵まれ、仙台湾の方から山形盆地の彼方福島の方まで、あらゆる山並みと盆地の白く化粧した姿が見えた。

夜はまた同じ宿で隠居暮らしを楽しみ、床についた。明日は刈田岳に登ってみよう。

踏み跡 < My mountains >



昭和 39 年 12 月 30 日

今日も一番バスで刈田峠の下まで入り、まずは峠まで登る。昨日と違って頂上を踏むと言う目的があるので、今日は緊張感がある。



峠からただっ広い尾根を踏み跡やシュプールを目印に登っていく。やがて樹林を抜けるとそこは季節風の世界。

雪面は海老の尾のように冰雪が付き、風は間断なく吹き荒れている。そんな斜面をしばらく我慢して登る内に、何となく平らなところへ飛び出た。石室が半分雪に埋もれて立っている刈田岳頂上。(左写真)

主稜の馬の背、熊野岳、地蔵岳が見渡せる。お釜が氷結して雪をかぶり、白い平坦地に見える。鳥居は雪をかぶって直径数mの太さになり、しかも積もった雪に埋まってしまい高

さは1m足らずになってしまっている。

昨日同様の好天で何でもよく見えるが、よくわかるのは磐梯吾妻方面と栗駒、飯豊。石室で軽食後下山。宿に戻り、着替えて宿を出る。宿賃は一泊二食付きで800円。

仙南バス角田行に乗り込む。今夜は祖母と水入らずの昔話。となる予定だったが、事件発生。

祖母は仙台(母の妹つまり叔母の家)へ行ったとのことで、誰もいない。もう戻るバスはないので、仕方なく裏口から潜り込み今夜もまた一人で、風呂を焚き食事を作り、囲炉裏に火をおこして隠居生活としゃれた。明日は大晦日。

昭和 39 年 12 月 31 日

遅い朝食をとり、昼前のバスで角田市に出て仙台行のバスに乗り換え、長町の叔母の家にたどり着いた。玄関をくぐってびっくり。祖母がいるばかりか、千葉のいとも来ている。期せずして三家のいところがそろい祖母も加わり、稀に見るにぎやかな正月を迎えることになった。

瑞巖寺から刈田岳、駅前旅館でのんびりした二日間、いとも同士で迎えた正月、岩沼の竹駒稻荷の初詣と色とりどりの味のある正月休みだった。

1月3日の夜、東北急行バスの座席は残念ながら女性の隣ではなかったが、満足な冬休みだったのでうれしさがこみ上げてくる夜行バスだった。

以上